

# 非常時に榮ゆる菩薩道

——特に御製を拜戴して——

前 田 聽 瑞

こゝに、昭和十二年の元旦を迎へ、大空をせましと匂ふ初日かけ、明らけくも朗らかにさしのほる東の空を望みつゝ、遙に皇居の方を拜して、一系連綿の寶祚ゆるぎなきわが皇室の御繁榮を壽ぎ奉ることは、まことに吾等大和民族の  
みが獨り持つ特異の有難さこゝ、そして大なる誇りであらねばならぬ。勅題「田家の雪」の御意は豊作に恵まれ、力溢れた農業日本の豊隆と潔白な雪にも似たる我が國民精神を具現し給ふたものと恐察するのであるが、それにつけても我等は悠久なるわが國史上、今年も亦躍進日本の最も意義深き一年たるべき確信を以て、こゝに昭和第十二次の新春を迎へ、我が萬世一系の皇威と我が帝國の理想を世界に輝かすべく、微力の限りを盡さねばならぬ。

## 二

目今、内外の情勢は今年もまだく非常時は急調の上り坂に向つて益々昂進せんとしてゐる。常住不斷にこれ舉國緊張の秋である。

われ等國民は切蹉砥礪愈々操守を固くし、一意奉公の至誠を擢んすべき覺悟を持たねばならぬ。この純正なる覺悟が君國に向けられる時、最も崇高なる光輝を放つが、しかしその眞に價值ある効果を擧げるのは、それが正しい眞面目な考慮を経た具體的な方法と努力となつた時である。年頭に於て眞面目にこの點を考慮することは、非常時に備へる身が

まへにして、更に眞の躍進日本を將來し實現する氣勢を助成し機運を増長するものにして是非とも緊要なこゝである。

今日の日本、内外ともに最も多事多難な非常時日本に欲しきものは、何と云つても高明にして雄大なる菩薩道である。菩薩とは菩提(覺)を求むる有情(衆生)即ち覺有情の意味である。世間では菩薩とし云へば觀音・普賢・文殊といふが如き所謂住定の菩薩の意味に解し勝ちであるが、かゝる神秘的な「超人間的なるもの」このみ考へてしまつては、斷じて菩薩に對する正しい理解ではない。拙速の嫌ひはあるが、あけすけに云へば他のために自己の一切を捧ぐる有力の大人、無私奉公の實行者は即ち菩薩である。『實積經』に謂ゆる「人を護りて己を護らず」底の犧牲の精神、利他の大行、これが菩薩道である。眞の自利は利他の徹底するところに始めて成立するものである。

無私奉公、利他の終局は畢竟自利となる。かゝる生活、かゝる行動こそ眞の菩薩道であり、純正の佛道である。この意味に於て菩薩道の實踐こそ、皇國日本を清明化し、堅正化し、淨土化するものであり、やがて宏遠なる御聖訓の御主旨を奉體する所以であると思ふものである。苟くも佛教者として生さんとする限り、否廣く忠良なる日本臣民として生さんとする限り、何よりもまづこの菩薩道を以て生活の指導原理たらしむることを念願せねばならぬ。

### 三

ところで、菩薩は元來身いまだ世俗に在りながら菩提を求むる人といふ義であるから謂はゞ在家道である。謂ゆる「世間に於て世間を離れ而も世間に住する」の道で、現實生活に没頭し乍ら、しかも去來進止情に係るこゝろなく、日進以て私を忘れ、日新以て公に奉ぜんとする忘私奉公への道である。菩薩道が出世間の道と稱せられるのは、世間に於て世間を離れ、現實に處して而も現實を超越してゐるこゝろに於てであつて、世間の離れのした實社會と交渉のない道といふ意味では斷じてないといふことは吾人の飽くまでも忘れてはならないこゝろである。それは兎に角として、菩薩道は在家道であり有力の大道であり、且つ高明なる佛道である限り、その修道の範圍は極めて廣く且つ自由で、通例

之を「六度萬行」に云ひ慣はしてゐる。

但し萬行ではあるが、所謂六度萬行で菩薩道にしてはこもかく萬行を六度（又は十度）に攝することになつてゐる。六度とは云ふまでもなく六波羅密（多）——Pāramitā——の譯語で、度は渡であり、到である。詳しくは度彼岸であり到彼岸である。現實の一步一步を理想の彼方へ渡し導く完全行の意味である、普通によく「度世」（渡世）といふ言葉が用ひられるが、實はこゝに起因してゐるのである。日に進み日に新なる生活即ち度世の法を奨勵するのがわが佛教である。「何ぞ衆事を棄てゝ、各々强健の時に曼びて、つこめて善を勤修し、精進に度世を願はざる」こは『無量壽經』の金言である。度世の法、それは正しくこの六度即ち（一）布施（二）持戒（三）忍辱（四）精進（五）禪定（六）智慧である。

翻へつて思ひを國內に馳せれば非常時諸相もいまだ緩和されず、世界的不安に共に國內的の不安も亦容易に解消さるべくも思へないのである。然し乍ら非常時なくしては國家の躍進はあり得ない。この非常時の克服には先づ以て内外の國防を以てその前提させねばならぬこは言を俟たない。しかもその内防は何と云つても國民の力であり、國民の教養力である。國民各自の自己完成、國民の教養を高めるこが何よりも今日の急務でなければならぬ。こゝに吾人は不出世の英主、明治天皇の御製を拜戴して、以てわが菩薩道の本義を顯彰し、吾等國民がこれ等の點について更に禪思一番せんこを至禱するものである。

#### 四

己が身を顧りみずして人のため

盡くすや人の務めなりけり

これは畏くも 明治天皇の御製である。今上陛下御即位の勅語にも「私ヲ忘レ公ニ奉シ」に宣はせられてある。忘私奉公の精神は他のため己を献ける心である。菩薩行としての布施の精神も他のために自分の所有、自由、乃至生命まで

も献けて已まない心である。國家社會は相互奉仕の道場であり、布施行の道場であらねばならぬ。佛教でよく云ふ「自身施」といふのは取りも直さず自己の生命を廣く國家社會のために供養し奉仕することである。言ひ換へれば心慈悲に住し、思ひ知恩報恩に存して、粉骨碎身、よく自己の職分をはげみ、喜び働き、拜み働くのが即ち自身施である。明治初年の愛國僧佐田介石上人が「國のため法のためて身のかぎり、つくして果てんたはれふすまで」と歌つたその心こそ自身施の全貌を現したものであると稱してよい。

## 五

また畏くも 明治天皇は

世の中に危きことは無かるべし

正しき道を踏みたがへずば

詠ませられ、常に國憲を重んじ國法に遵ふべき旨を御諭し遊ばされてある。遵法はすべての國民にまつての一大義務である。菩薩行としての持戒は實にこの遵法的精神を指導し振作するものに外ならぬ。持戒は今日の言葉で云へば道德そのものである。國法が人の行爲を規定するところは道德と相似てゐる。その法たるや常にその基礎を道德の上に置いたものであつて決して道德と離れたものではない。佛教に云ふ法(Dharma)なる語は法性としての法、或は教法としての法なご種々に使はれてゐるが、釋尊はその法の中に所謂世俗法―社會的秩序、職業的秩序―を含めて「法を見るものは佛を見る」として、國法を守り行ふことがやがて佛の本旨に契ひ、眞の佛道を歩むものであると遵法的精神を極力鼓吹してゐられるのである。國法は國民生活の正しき標準として誰人にも護持さるべきものである。道德を守り、正しき道に進むといふことは言ふまでもなく度世の法である。古歌にも「人多き人の中にも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」とあるやうに、吾人は全力を擧げてまづ「人」とならねばならぬ。端身正行の眞人とならねばならぬ。思つてこゝに到

れば、我等は今日に於て我が同胞と共に正しき道を踏み守るの外、他に語る可き言句を持たぬ。

## 六

雪に堪え嵐に堪えて後にこそ

松の位も高く見えけれ

これも畏くも 明治天皇の御製である。つめる、勵む、働く、修養するためには忍耐の力がなくてはならぬ。忍耐の力が強ければ強いほど、多くつめることも、勵むことも、働くことも、修養することも出来るのである。菩薩行としての忍辱は利他心、慈悲心の上に立つての忍耐であり、隠忍持久であつて寧ろ慈忍と云はるべきものである。慈忍の手近な例はこれを節婦慈母に於て見るこゝが出来ぬ。「雪は笠簷を壓し風袂を捲く、呱呱乳を覓む若爲の情。」常盤御前が牛若丸を懷に、今若、乙若の二人を兩脇に抱き、深い雪の路になやむところは正に慈忍の獨壇場。吾人は梁川星巖の「常盤雪行圖」の名詩を誦する毎に、常盤御前の慈忍行に思はずほろりこさせらるゝを禁じ得ないものがある。この慈忍行の最も偉大なる代表者は蓋しわが『無量壽經』に説かるゝ法藏菩薩であらう。菩薩は人我兼利、淨佛國土成就衆生のために世自在王佛の御前に於いて高明の志願、超世の本願を建て、「たゞひ身を諸の苦毒の中に止むことも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらむ」と表白して、堅正不卻、所欲を力精して、願行具足、遂に佛となり、現に西方に在しまして、衆生を哀愍覆護し給ふのである。偉大は企てゝ及ぶ結果ではないにしても、陽氣の發するところ金石も亦透る。「艱難汝を玉にす」といふ句もあるが、忍受苦に耐へなければ眞の實力はつくものでなく、輝く成功は到底望むべくもない。山中鹿之助先生は月を拜んで「願はくば我に七難八苦を與へ給へ」と祈つたが、熊澤蕃山先生も「憂きここの猶この上につもれかし、限りある身の力ためさん」と歌つてゐる。いはゞ忍辱は永續的勇氣である。聖壕の内に久しきに亘つて戦ふ兵士の心や、法難に處して堅忍不拔、意氣更に百倍する大宗教家の心なきは、皆その志願に勇んで退か

ないものでなければ出来ないことである。「夫れ忍むべからざるを忍ぶは萬福の原なり」(六度集經)といふ金言もある通り、私欲激情を抑へて心を鍛練するものは、人物を玉成することが出来るものである。忍辱は修養である。慈忍は即ちこれ道場である。宗教的修養は茲に發足せねばならぬ。

## 七

雨垂れにくほみし石を見ても知れ

かたき業さて思ひ捨てめや

明治天皇の御製の御趣旨の通り、凡そ何事もすべて勉め勵まねば成就し完成するものではない。菩薩行としての精進も亦飽くまでもその所欲を力精して已まざる堅正不卻の大勇猛心を謂ふのである。行誠上人は「法の海よしいかばかり深くとも、汲みほす迄は汲まむごぞおもふ」と詠じて深く法藏に入つたが、また三浦守治翁も斯道の攻究に燃えて「病む人の唯一人だにあらぬ世に、なすべき道を極めはててむ」と歌つてゐる。かゝる勇猛精進、志願倦むことなき力闘主義こそ正しく菩薩の精進行である。「一日有生一日有作」は百丈懷海禪師の言である。況んや其一日職に在れば、一日其職に精進努力すべきが天則である。與へられた自分の仕事、自分の使命を喜び勵んでゐるのは見るからに美しく、神々しい感をさへ與へる。

ところで、勇猛精進は時に猪突猛進を聯想せしめる。猪突猛進は大いに威勢がよい。所謂非常時日本の打開には適切にも思はれる。しかし乍ら、その一方にて隱忍持久、熟慮斷行の態度も大いに必要である。忍辱は消極的の加力實行であり、精進は積極的のそれである。吾等は非常時突破の要件として忍辱と精進の必要を特に考へたいと思ふ。一事の完成、回天の大事業は常に忍辱と精進の結果であることを銘記せねばならぬ。

## 八

こもすれば浮立ち易き人の世の

心の塵をいかでしづめん

明治天皇の我が國民を導き給ふ大御心の影は、この一首の中にありく、さうつし出されてある。凡そ何事にしても、その成功成就に大切なことは、第一にその事に一心一向になることである。熱心になる、眞剣になる、一生懸命になることである。菩薩行としての禪定は靜思熟慮である。他の言葉を以てすれば齋戒沐浴する心である。かの精進云ひ、不放逸云ひ、禪定云ひは實に向上欲、理想實現の法欲に燃えて自己の意志を禪思一心にその方にむくらの努力を指したものである。かゝる禪境にあつては全く現實を超越して、心の平靜が愈々純化されて、不動となり、湛然として明鏡止水の如き心境を展開し來るものである。意志鍛錬の手段としてその最も必要なるは、即ち外的に言へば戒行（道德的清規）を嚴守すること、內的に言へば禪定の力であつて、わが大和魂即ち武士道の精神も亦この禪的修養によつて鍛へ上げられねばならぬ。忠魂義膽の權化、大楠公の心も亦この禪的修道の結果だすれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

## 九

朝みぎり澄み渡りたる大空の

廣きをおのが心こもがな

實に 明治天皇は澄み渡りたる大空のやうな廣き御心、崇高な御心にあらせられた。菩薩行としての智慧は謂ゆる明鏡止水の内心の光りである。この輝く叡智の光は四維上下に涉りて一切衆生に對して絶對的同情心、絶對的愛他心となる。即ち智慧とは別の言葉を以てすれば日本精神であり、神代ながらの清明な心である。澄み渡りたる大空の廣き心である。明るく正しき和やかな心である。神の心、佛の心である。佛の心の表情は心地よい笑顔である。和顔愛語である。

この和顔愛語こそ實に法悦の春の姿であり、躍進日本の春の相でなければならぬ。

『佛遺教經』に「若し人智慧の照あらば、是れ肉眼なり。雖も而も是れ明見の人なり」とあるやうに、智慧ある人といふのは正しく見る目を具へた人である。正見の樹立、それが智慧である。正見の樹立は正行の進轉となる。その第一に來るものは自身施である。この布施行より始めて持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の道に昇る。こゝ窮極なく、永遠の生命に生きて行くのがわが菩薩道である。これにつきても佛が『無量壽經』の中に「汝ら是に於て廣く徳本を植えよ、恩を布き施惠して道禁を犯すことなく、忍辱を精進し一心を智慧を以てすべし」と仰せられたるくだりを拜誦すれば、如何に熱烈に菩薩道の實踐を鼓吹し強要されたか窺はれるのである。吾人佛教徒たるものはこの御勸誠に對して愧づべきことの多きを深く省察せねばならぬ。

## 一〇

わが雄大なる日本精神を最もよく現はしてゐるものは畏れながら明治天皇の御精神である。天皇の御精神は十萬首に承る御製の中に歴々窺はれるのであるが、吾人は偶々その御製に於て菩薩道の精神の御流露の影を拜し奉るものである。こゝに吾等國民は常に明治天皇の御精神を拜戴しつゝ國民的覺悟を堅め、洋々たる前途に向つて不斷の菩薩道的躍進を續けなければならない。菩薩道の精神は吾等國民の寶である。吾等はこの寶玉を懷いて、餘ろにそして堅正に、わが國力の充實を期し、以て皇國の威容を中外に顯揚せんとする。非常時日本の新春を迎ふるに當つて、吾等は更にこの覺悟を新にせねばならぬ。